

エビローグ

地下の京阪電車の入口へと急ぎ、大阪行き急行に飛び乗り、八幡市へ向かった。そして、八幡の駅で降り、タクシーをひろい、あの寺の前まで行った。もう、しっとりとした、晩秋の夕暮れである。

私は薄暗い寺のまわりを感慨深くまわって、見ると、寺は昔のままの姿を残して、それを見て、私は心がなごむ思いだった。安心した。寺の門の中に入り、本堂の方へと目を向けたが、誰も、いないようだった。家の戸口は昔と変わらなかったが、ただ、かたく閉ざされて、中は暗かった。そばに新築の家があり、その窓のすりガラスからは光がもれていた。

その戸口から、門を出て、そばの竹やぶが、晩秋の風で、ざわめく中、昔、彼女と歩いた、その道を、私は一人、表門までゆっくり歩いた。表門まで来た時、あの時、私の後ろで、立っている彼女の姿を思い浮かべた。私はコートのもいを立てながら、表門に立ち、後ろを振り向いたが、当然、そこには、だれもいなかった。遠く、寺の本堂の屋根が暗闇に浮かんでいるだけだった。

時間が来た。私は、表に待たせてあったタクシーに乗り、八幡駅に戻り、しばらく、電車が来るまで、暗闇の駅で電車を待った。そして、ゆっくり駅に入ってきた各停に乗った。丹波橋で、近鉄に乗換え、京都駅に向かった。時間はぎりぎりだったが、間に合った。私は、土産を買い、我が家に電話を入れた。

「もしもし、ああ、お父さん、今、お母さんに替わるね。」と、娘の元気な声が聞こえた。妻が出て、「今、京都駅、これから帰る。」と私はいつもの調子で、「報告」すると、「どうでしたか。充分、思い出に浸れましたか。」と妻は答えた。「パーカ。法要は無事終わったよ。皆、元気だ。これから、六時二十分のひかりで帰る。お土産に京の芝濱けを買ったよ。」と言うと、「まあ、それはどうもごちそう様」と、妻は答えた。妻は私の心を見抜いている様だった。丁度、ひかりが駅のホームに入って来た。「今ひかりが来たから」と言って、すぐに電話を切り、私は飛び乗った。